

さつま狂句 (有明町さつま狂句同好会)

兼題 「亭主」 政権ぬ 取やならじ亭主しや 女房ん後

小蓬原 忠則

〔評〕「何度抗てんどもこもならじ」とは泉洪神会遺者の一唱である。句中の政権とは少し大げさだが、自分の家庭に置き換えるともすこく滑稽に映る。まさに言わすもかな。心して取り組む決意を誇示したいところ。

兼題 「春」 白砂す撒つ 新か春い家族で 夢を抱つ

畑山 敏昭

〔評〕暦はすでに如月。立春、桃の節句と続く。あれこれと新しい年への夢を描いて、年の瀬には心身・邸宅を掃き清め、白砂を撒いて迎春との心境。新春への心意気を吹嘘と言つてよからうか。万事の成就に朝氣高揚を願う。

兼題 「旅」 旅支度 孫と毎晩 英会話

丸目 南兵衛

〔評〕この句は百十日はかつての例会で天賞獲得の作品。外国旅行に出掛けることになったが、不安が胸を過るのは外国語。そこで爺より外語力に富む孫相手に毎晩の特訓とは効果的だ。最近のカタカナ語への対応にも良しとするか。

兼題 「財布」 心細し財布 主しや知たん内ち 直き減つ 稲付 通夫

〔評〕不景気というか、家庭の財布も心細い。そんな中でも自宅消費に加え、近隣との交際その他出費多端。互いに知り尽くしている財布の中身が、知らない内に擦り減っていくという劇軽さ。相互連携強化で目出度く解決。

俳句 (ぎんなん俳句会)

冬霞優柔 不断を悔いて 居り 富山 達次
 ラジオ聞く 一人の卓やみかん 刺く 富山 茂子
 割烹着ゆるりと着たる 二日かな 吉村 万里
 めでたさを湯船に浮かべ 初湯波む 目黒 文恵
 睦まじく人待つ里に 枇杷の花 本村 光子
 夜神楽の笛深々と 胸の内 北川 雨水
 潮騒は心の糧や 破芭蕉 刀坂山美子
 凍星の太古の命 瞬いて 今井 洋子
 白菜の居座っている 台所 川上 豊
 燃え上がる雪の結晶 見て飽かず 和田 洋文

短歌 (松山南船短歌会)

待つ彼岸裏の花 咲かす千二百本庭のあちこちもう終わった
 戦争の勝者と敗者のアベックが行き交ひし吾が通学の道
 農道を昔をしのびつつ 散歩する小作の畑は 一面のキャベツ
 ひたすらに副作用に耐えた 目ひはるか 今日日は笑顔におおぐ空なり
 流行の服などよけて 手術後のわれの診療 変わらぬ装い
 秋彼岸の道影の微笑は 家族旅行の種子島にあり
 部屋中に甘き匂いを漂わせ 熟成されゆく吾が味噌こうじ
 三匹の紋白蝶のもつれ あい恋に敗るか 一羽舞い去る
 台風に傷つき歪な茄子二本 昼餉に焼けばこれ又美味なり
 盆休みひと日の帰省は あつと過ぎハグする孫に吾は包まれ
 すすき穂の風に吹かれて ゆらゆらとなびく穂波が 十五夜を待つ
 襟袖に見ごろの端までピンと張り干さるる 日向に母の生き様

如 美佐子
 前原 恭
 隈元 千五
 野口 順子
 石橋 道子
 川添八重子
 中島 昭
 吉元ミチ子
 大迫 鈴子
 藤田ミチ子
 山口 カツ
 高倉 律子



Japanese Poem of 31 syllables
 Haiku Poem Comic Haiku*

『志』・季・折・々

市内の美しい風景や、歴史・文化を感じさせてくれるものを紹介いたします。読者の皆様からの写真のご提供も、お待ちしております。

【今月の1枚：雪景色 (有明開田の里公園)】